

エストニア語

系統 ウラル語族バルト・フィン諸語

文字 ラテン文字

話者数 約 100 万人

① ② ③ エストニア語の辞書の話は、ドイツ人言語学者 F・J・ヴィーデマン Ferdinand Johann Wiedemann の『エストニア語・ドイツ語辞典』（1869）(1)から始めるのが適当だろう。この辞書は、実際のエストニア語口語の用例にもとづいた辞典で、当時の文語の綴りではなく、一種の音韻表記が使われている。この辞書に匹敵するエストニア語の辞書は、100年以上もあとの P・サークパック Paul Saagpakk の『エストニア語・英語辞典』（1982）(2)まで出版されていない。サークパックは、第2次世界大戦中にヘルシンキ経由でスウェーデンに亡命、1947年にアメリカ合衆国に移住したエストニア人の英語学者で、この辞書は最初イェール大学出版局から出版されたが、その後、エストニアの出版社が版權を買い取って再版した。

(1) 『エストニア語・ドイツ語辞典』 Ferdinand Johann Wiedemann, *Ehstnisch-deutsches Wörterbuch* (St. Petersburg, 1869, 第4版 Tallinn, Valgus, 1973)

(2) 『エストニア語・英語辞典』 Paul Saagpakk, *Eesti-inglise sõnaraamat* (Yale University Press, 1982, 第2版 Tallinn, Koolibri, 1992) 1,180 ページ。

エストニアとエストニア語をとりまく歴史を知らないと、エストニア語の辞書編纂の本当の苦労はわからない。

エストニア語の標準文語が成立した時期については、何を基準にするかによって、1880年代、1910年前後、1930年代の3つの考え方が可能で

あろう。1880年代は、エストニア語の最初の小説（E・ヴィルテ Eduard Vilde, 1882）が書かれ、エストニア語で最初の文法書（K・A・ヘルマン Karl August Hermann, 1884）(6)が出版された時期で、エストニア語の読み書きのできるエストニア人が、ようやく一定数に達したころである。1910年前後というのは、エストニア語の言語計画のなかでもっとも重要な4回の「言語会議」（keelekonverentsid 1908–1911）が開かれて、文法規範の統一が行なわれた時期である。その後、1918年、エストニアはロシア帝国からの独立を宣言したが、まもなく内戦となり、1920年になってソビエト・ロシアとの間で平和条約が締結される。国民国家エストニアの国語（riigikeel）となったエストニア語は、1920年代、言語改造といってもいいほどの言語改革の波に飲み込まれる。その嵐がようやく治まり、標準文語が安定期を迎えようとした1930年代の終わりに、エストニア共和国はソビエト連邦に編入され（1939年）、第2次世界大戦に突入する。エストニアが独立を回復するのは、ソ連邦が崩壊する1991年のことである。

(3) 『エストニア語詳解辞典』 *Eesti kirjakeele seletussõnaraamat* (Tallinn, Eesti Keele Instituut, 1988–2007)

エストニア語の「国語辞典」（エストニア語をエストニア語で解説した辞書）である『エストニア語詳解辞典』（3）は、第1分冊が1988年に出してから19年たった2007年12月末に最後の第26分冊（第7巻）が刊行され、ようやく完成した。この辞書の基礎となっているのは、ソビエト時代に長い年月をかけて、「言語・文学研究所」（今日の「エストニア語研究所」の前身）の辞書編纂部門で蓄積された、膨大な手書きの用例カードである。1980年代末から90年代初めにかけて刊行された部分には、語彙・表現を中心にソビエト時代の影響が色濃く残り、時代遅れの感が否めないこと、またソ連邦崩壊後の大きな社会変動の結果、大量の新語が生まれたことなどから、早くも改訂の作業が始まっている。編集主幹の話では、新版は新語を本文に組み入れて、5巻本になるという。

①辞書編纂の歴史

③現代のすぐれた一般辞書

②語史上にかがやく古典的辞書（および古典的文法書）

古典的な文法書についてもふれておこう。

- (4a) 『エストニア語タリン方言の文法』第1部「形態論」Eduard Ahrens, *Grammatik der Ehstnischen Sprache Revalschen Dialektes* (Erster Theil: Formenlehre. Zweite umgearbeitete Auflage) (Reval, 1853)
- (4b) 『エストニア語タリン方言の文法』第2部「文論」Eduard Ahrens, *Grammatik der Ehstnischen Sprache Revalschen Dialektes* (Zweiter Theil: Satzlehre) (Reval, 1853)
- (5) 『エストニア語文法』Ferdinand Johann Wiedemann, *Grammatik der ehstnischen Sprache* (St.-Petersbourg, 1875, 復刻版 Tallinn, Stiftung für Estnische Sprache, 2005)

E・アーレンスの『エストニア語タリン方言の文法』(4a)(4b)も、ヴィーデマンの『エストニア語文法』(5)も、エストニア語を母語としない研究者が、当時のエストニアの学術的な共通語であったドイツ語で書いた文法書なので、ここでいう「古典的文法書」の基準には必ずしも合わないが、前者は、教会のドイツ人聖職者の使うエストニア文語ではなく、実際にエストニア人たちが使うエストニア語を文法記述の対象にし、また、エストニア語の用例の表記を、従来のドイツ語風の綴りではなく、現在のエストニア語の正書法とほぼ同じ綴り方で表記した初めての文法書として、エストニア語史上に燦然と輝く文法であるとされる（1842年に出版された第1部の初版では旧綴りが用いられていた）。実際、著者のアーレンスは、この文法書のせいで、聖職者にふさわしくない思想の持ち主として、教会関係者からきびしく批判されたらしい。(5)は、同じ著者の(1)と同じく、データの信頼性の高さにおいて、19世紀の後半のエストニア言語資料としての価値が非常に高いとされている文法書（本文660ページ）で、その序章（80ページ）は、エストニア語の文章語、方言の研究史の概説となっている。この文法書は、2005年に復刻版が出て入手が容易になった。

④現代のすぐれた特殊辞書

復刻版では、デジタル技術を用いて誤植を訂正したため、原本巻末にあった4ページにおよぶ正誤表は削除されている。

エストニア語で書かれた文法書としては、次の2つが言及に値する。

- (6) 『エストニア語文法』Karl August Hermann, *Eesti keele Grammatik* (Tartu, 1884)
- (7a) 『エストニア語文法』第1部「音韻、形態、語論」Valter Tauli, *Eesti grammatika I: Hääliku-, vormi-, ja sõnaõpetus* (Uppsala, Finsk-ugriska institutionen, 1972)
- (7b) 『エストニア語文法』第2部「文論」Valter Tauli, *Eesti grammatika II: Lauseõpetus* (Uppsala, Finsk-ugriska institutionen, 1980)

K・A・ヘルマンの文法書(6)は、エストニア人によってエストニア語で書かれた最初の文法書で、現在のエストニア語の正書法の確立に大きな役割を果たした。言語計画の理論家としても知られるV・タウリの文法書(7a)(7b)は、1990年代の前半に出た2巻本の『エストニア語文法』(8(1))に大きな影響を与えた。

4 次のような特殊辞書が比較的最近になって出版されているが、現在ではもう手に入らないものが多い。

- (1) 『エストニア語分類語義辞典』Andrus Saareste, *Eesti keele mõisteline sonaraamat I-IV* (Stockholm, Vaba Eesti kirjastus, 1958-63)
- (2) 『エストニア語語源辞典』Julius Mägiste, *Estnisches etymologisches Wörterbuch* (Helsinki, Suomalais-ugrilainen seura, 1982-83, 第2版 Helsinki, Suomalaisen kirjallisuuden seura, 2001) 4,106ページ。
- (3) 『エストニア語俗語辞典』Katlin Vainola ja Lemmit Kaplinski, *Eesti slängi sõnaraamat* (Tallinn, Aule Kirjastus, 2003) 173ページ。
- (4) 『類義語辞典』Asta Õim, *Sünoniümisõnastik* (Tallinn, 自費出版, 1991)

④現代のすぐれた特殊辞書

(5) 『エストニア語正用法辞典』 *Eesti õigekeelsussõnaraamat ÕS 2006* (Tallinn, Eesti Keele Sihtasutus, 2006) 1,220 ページ。

スウェーデンに移り住んだエストニア人言語学者 A・サーレステの編纂した(1)は、エストニア語の語彙を綴りのアルファベット順ではなく、語義に分類して配列した分類語義辞典で、1979年に索引が出版されている。(2)の著者 J・マキステも、スウェーデンに移り住んだエストニア人言語学者である。

じつは(3)より10年以上も前に『最初のエストニア語俗語辞典』(Mai Loog, *Esimene eesti slängi sõnaraamat*, Tallinn, 1991, 173 ページ)という俗語語彙集が自費出版されている。著者が高校生のときに個人的に収集した語彙をまとめたもので、ヘルシンキの書店にも置かれるくらい話題になった。フィンランドの辞書編纂と異なり、エストニアの辞書編纂には、ソビエト時代まで俗語卑語の類は載せない伝統があったから、俗語辞典が出るようになったことは、エストニアの辞書学の新しい動きといえる。(4)は、著者の自費出版のようである。

(5)は、1918年にその最初のものが出版されて以来、エストニア語標準語の国語辞典の役割をはたしてきた *Õigekeelsussõnaraamat* (『正用法辞典』、愛称は *ÕS*) の伝統をひく辞典の最新版。もともとは、標準語の語彙とその綴り、活用語(名詞、形容詞、動詞)の活用型、不規則活用の場合の一部の活用形を載せ、正書法上の規範を記しただけの辞典で、この辞書に載っていない語や形態は方言と見なされてきた。1960年版(1976年改訂)が出版された後は、1988年から始まった『エストニア語詳解辞典』(①②③(3))の登場で、その使命をまっとうして姿を消すはずだった。ところが、いつまでたっても本命の『詳解辞典』が完結しないため、この辞書の需要がなくならず、むしろ用例などを追加して1巻本の国語辞典に近い体裁に改訂され、愛称 *ÕS* のまま、権威ある規範辞典として出版され続けている。

⑤現代のすぐれた百科事典

(6) 『外来語辞典』 Richard Kleis – Johannes Silvet – Eduard Vääri, *Võõrsõnade leksikon* (Tallinn, Valgus, 1961, 第7版2006)

(5)と同じく、ソビエト時代から出ている辞書の改訂版。この2冊の辞書を座右に備えれば、現時点で最も理想的なエストニア語の読書環境になるだろう。

(7) 『エストニア語方言辞典』 *Eesti murrete sõnaraamat* (Tallinn, Eesti Keele Instituut, 1994–)

刊行途中で、第14分冊(Kで始まる語の途中)まで出版されている(2006年現在)。

(8) 『エストニア語逆引き辞典』 *Rückläufiges estnisches Wörterbuch* (Universität Beyreuth, 1979) 635 ページ。

1960年版の『正用法辞典』(上の(5)の解説を参照)の見出し語を語尾を基準に逆順に並べたものである。

このほかにも、さまざまな分野の専門用語辞典が出ているがここでは省略する。

⑤ エストニア語の百科事典は、現在までに3点が出版されている。

(1) 『エストニア百科事典』 *Eesti Entsüklopeedia I* (1932) – VIII + *Taienduskoide* (1940) (Tartu, Loodus)

(2) 『エストニア・ソビエト・百科事典』 *Eesti Nõukogude Entsüklopeedia I* (1968) – VIII + *Lisa* (1978) (Tallinn, Valgus)

(3) 『エストニア(・ソビエト・)百科事典』 *Eesti (Nõukogude) Entsüklopeedia I* (1985) – 14 (2000) (Tallinn, Valgus (–6: 1992) / Tallinn, Eesti Entsüklopeediakirjastus (7: 1994–))

⑥現代のすぐれた学習辞書

⑦現代のすぐれた他言語対訳辞書

(1)は、それほど奇観書ではなく、今でもときどき古本屋で手に入る。内容的には古くなっているが、読み物としてみると(2)などよりはるかにおもしろい。(2)はソビエト時代の出版物だが、当時、一般にロシア語の百科事典には書けなかったことがら、エストニア語の百科事典には書かれていたりすると、エストニア人は自慢していた。

(3)はソビエト時代に刊行がはじまったため、当初は *Eesti Nõukogude Entsüklopeedia* (『エストニア・ソビエト・百科事典』、略称 *ENE* [女性の名前!]) だったが、ソ連邦崩壊直前の1990年に出版された第5巻から、「ソビエト」が落ちて、名前が *Eesti Entsüklopeedia* (『エストニア百科事典』、略称 *EE*) にかわった。最初の方の巻は、ソビエト時代の編集ゆえ、内容に関する評判がかならずしもよくないので、全体として「すぐれた百科事典」かどうかは評価が分かれるだろうが、「エストニア」関連の項目だけをまとめた第11巻と第12巻は、2巻本の「エストニア百科事典」として便利に使える。第13巻は補遺と索引、第14巻は人名辞典になっている。

⑥ エストニア語の学習辞書として編まれたおそらく唯一の辞書だが、現在では入手できないし、出版物の性格からいって、歴史的に興味深い辞書として記録するにとどめる。

『エストニア語・ロシア語学習辞典』 *Eesti-vene õppesõnastik* (Tallinn, Valgus, 1984, 第2版1990)

⑦ 他言語との対訳辞書は、基本的にエストニア人の外国語学習者用に作られており、概していえばエストニア語の学習者向けではない。英語などとの対訳辞書で、現在手に入る本格的な辞書には次のようなものがあるが、一部はまだ刊行途中である。

(1) 『現代エストニア語・英語辞典』 Andres Aule, *Tänapäeva eesti-*

⑦現代のすぐれた他言語対訳辞書

inglise sõnaraamat (Tallinn, Eesti Keele Sihtasutus, 2001–)

(2) 『エストニア語・英語辞典』 Paul F. Saagpakk, *Eesti-inglise sõnaraamat* (Tallinn, Koolibri, 1992) (= ①②③(2))

(3) 『エストニア語・英語辞典』 Mari Kerge, Maarja Märss, Inga Mölder, *Eesti-inglise sõnaraamat* (Tallinn, Festart, 2004)

(4) 『エストニア語・ロシア語辞典』 Anne Romet, Nelli Melts, *Eesti-vene sõnaraamat* (Tallinn, Eesti Keele Sihtasutus, 1997–)

(5) 『エストニア語・ドイツ語辞典』 Kallista Kann, Feliks Kibbermann, E. Kibbermann ja S. Kirotar, *Eesti-saksa sõnaraamat* (Tallinn, Valgus, 1964, 第5版2003) 1,245 ページ。

(1)は、完結すればこれまでにない大型のエストニア語・英語辞典になるはずだが、残念ながら、kではじまる見出し語を収録した第2巻(2003)まで出ただけである。(2)については、すでに何度か話題にしたのでもはや解説の必要はないと思われる。1巻本のエストニア語・英語中辞典が何種類かあるなかで(3)だけをあげたのは、この辞書の2001年版がCD-ROM版つきだったからである。2004年版ではCD-ROM版はなくなってしまった。エストニア語・ロシア語辞典は、専門用語辞典類を除くと、人気がないようである。現在刊行中の大辞典(4)は、第1巻(A–J)1997年、第2巻(K–L)2000年、第3巻(M–P)2003年、第4巻(R–tipu)2006年まで刊行されているが、まだ完結していない。この大辞典の特徴は、エストニア語・英語辞典、エストニア語・ドイツ語辞典などと異なり、エストニア語の見出し語に、語形変化や不規則形に関する情報が添えられていることで、ロシア語系エストニア人たちの需要をはっきりと意識して編集されている点にあるといえる。エストニア語・ドイツ語辞典は、ドイツでも出版されているが、ソビエト時代から人気のあったこの辞典(5)の最新版がおすすめである。他言語との対訳辞典には、このほかに、フランス語、スウェーデン語等々を筆頭に、旅行者用の小辞典・語彙集までも含め

⑧現代のすぐれた文法書と入門書

ればさまざまなものがある。

⑧ いわゆる参照文法 (reference grammar) という意味での「現代エストニア語の文法書」としては、次の2つをあげる。(2a)(2b)はもともエストニア語で書かれた文法(①②③(7))の英語版で、用例に英語訳がついているかわりに、原著にあった用例が大幅に削減されている。また、著者が、ソビエト体制を逃れてスウェーデンに移り住んだ言語学者であるため、エストニア本国の規範文法(1a)(1b)とはかならずしも合わない記述もある。(1)の編集責任者である M・エレルト Mati Ereht と話したときの印象では、(1)は(2)を強く意識して編集されたようであり、2つの文法書の構成がよく似ているのはその名残かもしれない。

(1a) 『エストニア語文法』第1巻「形態論, 語形成」Ereht, Mati et al., *Eesti keele grammatika I. Morfoloogia, Sõnamoodustus* (Tallinn, Eesti Teaduste Akadeemia Eesti Keele Instituut, 1995) 660 ページ。

(1b) 『エストニア語文法』第2巻「シンタクス」Ereht, Mati et al., *Eesti keele grammatika II. Süntaks* (Tallinn, Eesti Teaduste Akadeemia Eesti Keele Instituut, 1993) 464 ページ。

(2a) 『標準エストニア語文法』第1部「音韻, 形態, 語形成」Valter Tauli, *Standard Estonian Grammar, Part I. Phonology, morphology, word-formation* (Acta Universitatis Upsaliensis. Studia Uralica et Altaica Upsaliensia 8) (Uppsala, 1973) 237 ページ。

(2b) 『標準エストニア語文法』第2部「シンタクス」Valter Tauli, *Standard Estonian Grammar, Part II. Syntax* (Acta Universitatis Upsaliensis. Studia Uralica et Altaica Upsaliensia 14) (Uppsala, 1983)

英語で書かれたエストニア語の入門書には、次のようなものがある。

(3) Christopher Moseley, *Colloquial Estonian* (London, Routledge, 1994)

⑧現代のすぐれた文法書と入門書

(4) Felix Oinas, *Basic Course in Estonian* (London, Routledge, 1997)

(5) Juhan Tuldava, *Estonian Textbook: Grammar Exercises Conversation* (Indiana University Uralic and Altaic, Vol. 159, Bloomington, 1995)

(3)には音声 CD がついている。(4)は非常に詳しいが、出た年代が古い教科書のリプリント版なので、現在のエストニア事情を学ぶには適していないかも知れない。旧版についていた大量の音声資料(音声カセット 20 数巻!)は、今ではもう入手できないようである。

わたしは 1991 年にエストニア語の集中講座(160 時間)を東京外国語大学で担当したが、そのときの文法教材(6)と語彙集(7)を再編集してインターネット上で公開しており、日本語ではこれが唯一の入門教材のようである。

(6) 松村一登『エストニア語文法』

(<http://www.kmatsum.info/eesti/opik/>)

(7) 松村一登『エストニア語小辞典』

(<http://www.kmatsum.info/eesti/sonastik/>)

松村一登 (まつむら・かずと)